

## **2015 年度秋季人権週間プログラム映画上映&講演**

日時：2015 年 11 月 10 日（火） 18：00～20：45

会場：立教大学 新座キャンパス N313 教室

### **映画『みんなの学校』 上映&専門家による講演**

講師 高木 智 氏（新座市教育委員会 教育相談センター）

熊上 崇 氏（本学コミュニティ福祉学部助教）



## 【熊上氏による映画上映前の解説—『ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）』を中心に—】

### 発達障害と社会的包摂

○熊上 皆さん、こんにちは。立教大学の熊上と申します。これからぜひ皆さんと一緒に観て楽しみたいなと思っています。

最近、内閣が「1億総活躍国民会議」を設置しました。そこにタレントの菊池桃子さんが呼ばれました。ご存じでしょうか。菊池桃子さんと言えば、私が中学生ぐらいのときのアイドルですが、どんなことを言うのかなと思っていたら、新聞に、『「1億総活躍」という名前ではなくて、『ソーシャル・インクルージョン』という名前はどうか』と発言したそうです。菊池桃子さんはタレント活動をしながら大学院で政策学も勉強されていて、そのような発言をされたわけですが、この意見は全く同感でした。「1億〇〇」というと、戦前の「1億火の玉」とか「1億総ざんげ」のようなことを思い出す方もいらっしゃると思いますが、「ソーシャル・インクルージョン」、これは日本語で言いますと、「社会的包摂」です。「包摂」は、包み込むこと、つまり、社会からこぼれ落ちる人をなくすという政策で、これが「ソーシャル・インクルージョン」です。「1億総活躍」というよりも「社会的包摂」のほうが、今後の社会に求められているのではないかなと思います。

ところで、以前の民主党政権のときに、内閣府に置かれた社会的包摂推進室があります。このとき出

された報告書ですが、例えば、ホームレス、薬物依存、若いうちに自殺してしまう、そういう事例を50数例集めて、その人たちが社会的包摂の反対＝社会的排除、ソーシャル・エクスクルージョンといますが、どのような経過で排除されていったかを調べた研究があります。これはインターネット上でも公開されていますが、50数事例の非行、薬物依存、自殺、これらの事例を見ますと家庭環境の問題もありますが、幼少期からの発達障害の問題も見逃せないと言われております。これは、発達障害があるから薬物依存になるということではありません。発達障害があるけれども、そのまま放置されてしまった、あるいは、家庭環境によってそれが増幅してしまったなど、環境面の相互作用により、こうした社会的排除に結びつくといわれています。発達障害があるお子さん、生まれながらにして何かしらのハンディのあるお子さんを社会でインクルージョンする、社会的に包摂していく。これによってそうした排除を防止することができると言えるのではないかと思います。

私の専門は少年非行でありまして、立教大学を卒業した後は家庭裁判所調査官の仕事長くやりました。少年非行や親権問題が専門ですが、事件を起こし、なかには少年院に行く子どももいます。私は少年院に行っているいろいろな検査をしていました。それは読み書き算数の検査です。少年院の子どもたちはいろいろな教育を受けていますから、応答はしっかりしているのですけれども、こういう問題があります。算数の検査をしたときに、「2分の1と3分の1はどちらが大きいですか」、という問題を出すと、ほとんどの少年が「3分の1のほうが大きい」と言います。つまり、これは小学校2、3年ぐらいのところでもつまづいてしまっているということです。もちろん家庭環境の問題もありますが、そのまま放置されてしまって、中学校に上がったときは、勉強が全くわからない。教室からいなくなってしまう、遊びに行ってしまうという生い立ちになった子どもが多くいました。その子どもたちが、少年院で

学習支援教材などを使って、その人のレベルに合ったところから勉強します。ゴールは社会に出て役立つ勉強、例えば、溶接とか重機の運転、そうした免許が取れるように勉強をしていきますが、それも基本的に読んだり計算ができないとなかなか免許を取れない。本人たちは何とか社会に復帰する、社会に出て頑張るために、資格を取りたいという気持ちがあります。皆さん、想像できますでしょうか。少年院は、夕飯後は自由時間ですが、みんな一生懸命、算数などを勉強しています。彼らに聞くと、勉強したいけれども勉強できなかった、やり直すチャンスがなかったという話を聞きます。どんな子どもでも勉強したい、社会で認められたいという気持ちは必ずあると思います。

不幸なことに、少年院へ行った子どもたちは、学校生活ではチャンスにあまり恵まれなかったかもしれませんが、きょうの映画は、どんな子どもでも受け入れる学校というのがテーマです。大阪の小学校の話ですが、このパンフレットを見ますと、220人ぐらいの生徒数で30人ぐらいが発達障害の傾向があるそうです。そうすると、10%を超えていますので、非常に大きな数だと思います。

発達障害といいますと、主に注意欠如多動性障害（Attention Deficit Hyperactivity Disorder、略称 ADHD）や、自閉症スペクトラム（Autistic Spectrum Disorder、略称 ASD）、それに学習障害のお子さんのことを指すわけです。文部科学省の調査では、だいたい通常学級の6.5%といわれていますが、小学校1年生では約9%といわれています。障害というよりも多動性、衝動性のある傾向が見られるお子さんが、小学校の段階では相当数いるということは確かですが、その子たちが社会的にインクルージョンされるために、どんな試みがあるのかという点でも、この映画をぜひ観たいところです。

社会的包摂ですが、もともとはヨーロッパでの概念です。例えば、サッカー選手を見ると、イタリアでは黒人のストライカーのマリオ・バロテッリ選手、フランスのジネディーヌ・ジダン選手等アフリカや

中東出身の人がヨーロッパにたくさんいて、プロサッカー選手として活躍している。サッカーで活躍できればいいですが、活躍できない子もたくさんいます。そうした子どもたちが、社会から逸脱してしまっている。それで暴動を起こしたり、非行に至ってしまったりということが社会問題となり、ヨーロッパのイギリス、フランス等々でこのソーシャル・インクルージョンという概念が発達してきたといわれています。

日本では、最近ようやくソーシャル・インクルージョンという概念が市民権を得るようになってきたように見受けられます。しかし、どうでしょうか。日本でも、例えば在日外国人や在日韓国・朝鮮の方、中国の方、そういった方々に対する排除的な言動も見られることがあります。非常に悲しい出来事だなと思います。社会的排除ということがまだまだ根深くあるかもしれません。そういう動きに対抗するためにも、例えば教室の中でなかなかじっとしてられない子どもでも、人の気持ちがわからず行動してしまう子どもでも、どんな子どもでも教室でみんなでインクルージョンしていく。そういうことがこれから、教室だけでなく、日本全体にも求められていくのではないかと。それが人権意識につながっていくのではないかと思いますし、大げさに言うと、世界平和にもつながっていくと思います。少し話が大きくなりましたが、ソーシャル・インクルージョン、社会的包摂という言葉を胸に置いて、私も映画を鑑賞していきたいと思います。

## チャレンジング・ビヘイビア

それから、家庭裁判所に勤めていたときの話をします。例えば、暴走族の少年を面接することがよくありました。彼らの1つのパターンとしては、以前は、少年野球のピッチャーだった、小学校のサッカーチームのエースだった、しかし、けがをしたり、監督とけんかした、などで途中でやめてしまったという子どもが多かったです。彼らはもともと勉強が苦手なのですが、でも、自分はこんなはずじゃ

ない、もっと社会に認められたいという気持ちがある。そのときにどうしても教室内で、悪いほうで目立つ行動をとってしまう。同じように、しょうがいを持っている子どもが、自分をもっと見てほしいと思い、うろつき回る、ものを壊してしまう、そういう行動をとるときがあります。こうした行動を、障害科学では Challenging behavior といいます。日本語に訳すと、挑戦的行動です。これは、我々教える側、包み込む側が挑戦されている。この子どもが何か訴えて挑戦してきている。Challenging behavior をしてきている。そういうふうに取り返すことで、我々も、じゃあ、その子とどうやって付き合っていくのか、この子をインクルージョンするためにはどうしていくのかということも考えられるのではないかなと思います。この Challenging behavior という概念もぜひ心にとめて観ていただいてもいいと思います。実際に目の前で Challenging behavior、例えば、ものをどんどん壊して、反抗的になっていくと、感情的になってしまうのが人間だと思います。そういう自分とも向き合いつつ、その子たちの Challenging behavior を受けとめる。そういう視点を持っていくためにも、この映画を観たいと思います。では、皆さんと一緒に楽しんでいきたいと思います。

### 【映画上映】

### 【映画上映後の高木氏、熊上氏からの解説と質疑応答】

○熊上 まず高木先生から映画をご覧になった感想などを伺って、その後、フロアの方と質疑応答をしたいと思います。では先生、よろしくお願いします。

○高木 皆さん、こんばんは。新座市教育委員会の高木と申します。あっという間に終わってしまったと感じた映画でしたが、きょうの映画はどういう内容なんだろうかと非常に深く思っていました。学校における一年という、入学式に始まって卒業式で終わり、また入学式がある。その中で、校長先

生のお力がすごく感じられた。特に先生方を伸ばしていこうという姿ですね。私自身は、これまで学校現場にいたときに、特別支援学級や特別支援学校で働いてきました。きょうの映画の中で、この学校のすごさは、子ども、親、保護者、そして先生方、それぞれにちゃんと責任を負わせているところだと思います。何かを起こしてしまったお子さんでセイシロウ君がいましたが、何かが起きたら必ず校長室へ行って、自分がやったことを話す。それでまた何か悪いことをしたら謝りに行って、それでまた教室に戻る。その投げかけは、本人たちにとって非常に厳しいと思います。でも、きちんとやっていく。だから、学校の中ではまた教室の中に戻っていけるというのが、ここの学校では必ず一貫してあるのだと思いました。

それから、転入場面ですね。セイシロウ君ともう一人が途中で転入してきた場面がありましたが、ここで、その子について教員たちが話し合う場面ではかなり突っ込んだことをおっしゃっていたと思います。通常なかなかそういうことを伝えきれないところがあると思います。そして校長先生が言ったのは、「一人一人ありのままを受け入れる」です。「ありのままを受け入れる」ということは、全てクローズしているものは開け放つ、ディスクローズしていくことです。だからこそ、大空小に30人以上いるであろう特別な支援が必要なお子さんたちが生きていけるのかなと思いました。

最後のところで私の胸に残ったのは、ユヅキ君に対して校長先生が言った「この一瞬一瞬は本気なんだ」ということでした。子どもたちは同じことを繰り返す。我々大人にしてもそういうことはあると思います。同じことを繰り返してしまっ、ああ、失敗だなと思うことがきっと皆さんもあると思いますが、でも、その一瞬一瞬をどうクリアしていったらいいか。その点と点をつないで線にしていってあげられるか。そこはやはり教育の課題なのかなと思いました。これが感想です。

○熊上 ありがとうございます。それでは、どうでしょう。ご意見、問題提起、何でも結構ですので、どうぞ。

○質問者1 1つ気になったことがあります。大空小学校に通っていた小学生の子どもたちの中には、本来であれば特別支援学級でないと授業を受けられなかった子どもたちもいると思います。大空小学校を卒業された支援の必要な小学生の子たちは、中学校へ進学して、今後どのような中学校生活を送るのか。あるいは送っているのかというのが気になりましたので、質問させていただきました。

○熊上 大変いい質問ですね。では、高木先生お願いします。お答えのできる範囲で結構です。

○高木 映画の中で大阪市立大学の先生が話されていて、そこに保護者の方がいらっしゃって、中学校進学の話をしていましたね。中学校進学に際して、普通中学校に進学するのは難しいという現実があるので、特別支援学級や特別支援学校という選択になってくると思います。

○熊上 映画の中で重い自閉症の子や知的しょうがいの子もいました。少し重いしょうがいの子は、特別支援学校に行くと思います。一方で、時々暴力を振るってしまう子がいましたが、彼は恐らく知的には正常範囲だから、通常の中学校へ行くと思います。このような、発達障害などの診断まではなされずに特別支援学校には行かないけれど、通常の学級では困難がある子たちが、中学校に上がってから苦労していくと思いますので、そこでどのようにサポートできるかということだと思います。暴力を振るってしまったときに、まわりの大人、地域の人がいかに排除せずに支えていけるかというのが、本当に問われているのかなと思います。

それから、映画に登場したセイシロウ君は自閉症スペクトラムの傾向があるお子さんだと思いますが、知的能力は高いので、支援学校ではなく通常の中学校へ行く可能性もあります。しかし、中学校に入って、まわりの生徒から「何だ、あいつは」と言



われたり、先生が「こんな子は困る」と思うと、また不登校になる。いかに、セイシロウ君へのサポートに関する情報共有ができるのか、小中連携できるかということが成功のポイントなのではないかと思います。その点はいかがでしょうかね。

○高木 情報の共有ですか。新座では、情報の共有について小中間の連携を行っています。生徒指導上の問題であったり、小学校卒業の際には、さまざまな情報をお互いにつかんでいくことによって、円滑な小中の接続を行っています。それ以前では、幼稚園・保育園と小学校で連携しています。連携は、現実としてあります。

○熊上 先ほどの質問のように、小学校はよかった、中学校はボキッと折れてしまったというふうにならないことが、一番大事ななと思いますので、そのような子に対する情報の共有や支援方法の共有が、今後求められていくと思います。

○質問者2 きょうは貴重なお話と貴重な時間をありがとうございました。この映画は子どもたちへの働きかけを中心にドキュメンタリーが製作されていたと思いますが、保護者の方々への働きかけや地域の方々との協力をどのように仰いでいるのかがすごく気になりました。子どもたちへの働きかけは、目の前にいる子どもたち一人一人とかわることが大きいと思いますが、現状ですと、保護者の方々にお話しする機会が減ってきていて、保護者会にも実際にはなかなか出席してもらえないという話を現場の方

から聞いたことがあります。それについて、どのような解決をされているのかをお聞きしたいと思います。

○熊上 ありがとうございます。現場の高木先生としましては、どうでしたか。

○高木 サポーターのような形で取り組んでいるケースがあります。新座市の例ですが、学校応援団や、お父さん方に協力いただく「おやじの会」があります。それには情報発信が重要です。学校からどのように協力を依頼するかですが、保護者を含めた地域の方にいろいろな場において、このような行事があるのでぜひ見に来てくださいと、お伝えすることによって、学校を知ってもらう機会をつくっていくことがあります。地域の人材や協力してくれる団体があることで、その地域の方々を学校に招き入れられます。

映画の最後のエンドロールのところで、いろいろなボランティアの存在がありましたね。図書サポーターやボランティアという普通の形式のものもありましたが、映画の途中で6年生の男の子、カズキ君が蹴ってしまったパトレンジャーの方がいました。そういう組織があったり、いろいろな意味で外部支援が、いろいろな力が入っている学校なんだなと思いました。大空小学校は、校長先生が外部に対して支援を求めるすごく働きかけをされてつくりあげてきた学校だと思います。

○熊上 ありがとうございます。セイシロウ君のお母さんが「ここに来てよかった」と涙を流していたシーンがありました。本当にセイシロウ君のお母さんは、毎日気が気じゃなかったと思います。だから、子どもと一緒に学校に来て、セイシロウ君が次第にクラスになじんでいてすごくうれしかったと思うし、職員室でその気持ちを先生に言っていました。保護者が気軽に職員室に入ってお話できる、それがすごくいいなって、そんな関係づくり、開かれた学校というイメージがありましたね。

逆に、すごく心が痛くなったのは、最後の卒業式のシーンです。水泳の授業で水着を買ってもらえず

登校しなかったカズキ君ですが、卒業式でみんなきちんとした服を着ているのに、カズキ君はトレーナー姿でした。でも、すごく立派に卒業証書を受け取っていました。誇り高い顔ですばらしいなと思いました。でも、親に卒業式の服を着せてもらえなかった。そのつらさはいかばかりだろうかと。ほかの人が持っているものを自分が持っていないというつらさは、子どもにはすごくあると思います。そのことについて、校長先生が保護者の方に電話をしていましたね。「水着を買ってあげてよ」とね。ああいう保護者の方も現実にはいるので、あきらめずにフォローして連絡をとってあげる。それから、少しでも親に対してもできたらほめてあげる。「水着買ってあげてすごいね」とか、そんなようなことを、僕も非行少年の仕事をしていたときに、保護者をほめてあげるというのは、上から目線かもしれないけれども、それによって保護者もうれしい。保護者の自尊心も高める、そういう関わりもすごく大事かなと思っています。

私が少年事件の仕事をしていたときは、少年の指導もしますけれども、どちらかというと保護者に「大変だったけど、なんとか頑張ってきたのですね」と言ってあげるのが大事だと思って、それが少年の立ち直りに結びつくような経験をしたことがあります。例えば、卒業式のときに「なんでトレーナーしか着せてあげないんだ」、「なんでプールの水着を買ってあげないんだ」と責めたい気持ちにもなりますが、そうではなく、少しでも保護者の自尊心も上げるということが、子どもの成長にもいい影響があるのではないかなと感じました。

○質問者3 先ほど先生がおっしゃっていたように、最後にセイシロウ君の母親が「本当にここに来てよかった」とおっしゃっていたわけですが、僕たちが目指すのは、子どもも親も地域の大人も、この学校に来てよかったと思える学校づくりだと思います。そのためのヒントがこの映画にはたくさんあったと思います。今のコメントの中にもたくさんあつ

たと思いますが、例えば教員研修や保護者や地域の関係者を交えた中でこの映画を観て、ヒントを探し合うような機会が出てくると、「この学校に来てよかった」となる学校づくりにつながるものがだんだん実現していくのではないかと、という思いを持ちました。ぜひいろいろな自治体で、こういった映画を観た上での研修や話し合いを進めていくことがとても大事なのではないかなと思いました。

僕はことし3月まで東京のある区の教育委員会では36年間働いていました。社会教育主事という立場ですが、終わりのほうの仕事の8年ぐらいが学校支援の仕事でした。その区は中学校の就学援助率が40%で、本当に荒れている部分もありますので、地域が変わらないと成り立たない学校ばかりになります。就学援助率が7割を超える学校もあります。映画の中で「〇〇ボランティア」という方が出てきましたが、どれだけ地域の協力を得られる学校づくりを進めるのか。開かれた学校づくりということが本当に大事で、助けてと言わないと、地域の人はなかなかやりにくかったりしますので、何でも言える、マイナス情報も含めて出していけるような、隠さない学校、開かれた学校づくりを、校長先生を中心に、特に先生方の中で情報共有を大切に、みんなで変わっていきこうという姿勢を地域に見せていくと、地域の人たちにも、学校のためだったら、子どものためだったら関わりたいという人がたくさんいるわけです。その力を使って学校をよくすることが地域をよくすることにつながるというような考えを、校長先生や市教委の方がされることを、この映画を観て、やっぱりそうなんだということが確認できてとてもうれしかったです。きょうはありがとうございました。

○熊上 質問ですが、例えば、活動されていて、地域との連携で何か工夫された点がありましたら教えてください。

○質問者3 例えば、区民の方が学校の授業を評価したり、経営も評価する。学校関係者評価や授業評価をかなりやっています。始めたころはけんかです

ね。私も校長会でけんかをして、「素人に何ができるんだ」と言われるわけですが、だんだん変わっていくわけです。先生方も言ってもらおうと気がつくことがいっぱいあるのだと。評価する区民の人に対して、私たちが研修会を開いたりしました。映画の中で校長先生が一生懸命ほめていましたが、評価というのは、いいことはいいとほめるということで、地域の人に関わっていくと、若い先生は本当に喜ぶわけです。その背景には、何年か前に、新規採用1年目の教員が自殺をしまして、全然学校は支えられなかった。厳しい状況の中で一人だけで一生懸命やって死んでしまったというわけです。そういうことも含めながら、支え合う学校づくりの思いを、そのために気軽に話し合える場、先生方と地域の場を、区はそのための組織を全部の学校でつくったわけです。区が補助金を出していろいろな活動を支援する仕組みもできています。そういった中で頑張っている学校の幾つか、小中学校合わせて100校ぐらいありますが、その中の10数校をコミュニティスクールに指定して取り組んでいます。当事者支援をしながらやってきたという経緯があります。助けてと言わなくても地域が出て行く、地域の力をつけていくための研修をする、そういうことも我々の役割です。子どものためにと思っている人たちをどのように学校とつなげていくのかを校長先生と話し合ったりします。私は何年間も、他の区から転任してきた校長先生に区の様子をお話する仕事をしていました。なかなか厳しいところもたくさんありますので、そういう意味では、地域の様子を早く先生方に理解していただいて、地域を見た上で、どんな情報が地域にあって、それをどううまく使っていくのか。そういう経営能力を校長先生や副校長先生につけていただいたりする支援もまた教育委員会の仕事です。そういうことを通して、地域を見る目を先生たちに持っていていただくと雰囲気が変わってくるのではないかと、思っています。応援する気持ちをどれだけ受けとめていくのかということです。

○熊上 ありがとうございました。今、コミュニ

ティースクールという言葉が出ましたけれども、地域の方が学校の経営に関与するという試みですね。非常に効果があるといわれています。何か皆さん、他にありますでしょうか。

○質問者4 3年ぐらい前に朝日新聞の連載で「いま子どもたちは」という記事がありましたが、私はそこで大空小学校の存在を知って、ずっと気になっていました。全国いろいろなところで上映会をしていると聞いていたので、いつか観たいと思っていたのですが、最近キャンパスの立て看板を見て、観ようと思って参りました。

印象に残ったことはたくさんありますが、一番は、最後に校長先生が卒業式の際に、マーちゃんというしょうがいのあるお子さんがいらっしゃったと思いますが、「マーちゃんがいてくれたから、みんながたくさん学ぶことができた」という言葉に、非常に印象を受けています。子どもにしょうがいがあるかないか、それはいろいろあると思いますが、学校の一員として活かしていくか、あるいは排除していくかによって、その子どもだけでなくほかのお子さんであったり、教員であったり、地域であったり、そういう人たちが伸びる可能性に大きくかわっていくのではないかという感じがして、ある意味、少し怖い思いもありました。大空小学校以外はどうなのかなという、そこで少し怖さを感じました。

1点だけ質問させていただきたいことがあります。中盤ぐらいに、教育相談という言葉があったと思います。私も何回か教育委員会に行く用事があって、教育相談の部屋に誤って入りそうになったことがあります。私が学んだ知識からでは、例えば特別支援学校にあっせんしたり、親御さんに何かしら情報提供をするというのは、頭ではわかっていますが、あまり表立ったイメージがありませんので、教育相談では、そもそもどういことをされているのか。新座市や最近の国の取組みは、どういうものなのかをお聞きできればと思ひまして、質問させていただきます。

○高木 ありがとうございます。大空小学校以外はどうなのかというご質問ですが、1つは、地域のお子さんに関して、どの子も受け入れ、排除するという論理は学校においてはありません。そういうふうには私自身は認識しています。特に先ほどもお話がありました。特にはほめることによって伸ばしていくという姿勢は、新座市内の学校についてもあると思います。子どもに対しての大人、教員、保護者に対してもですが、適切な支援の仕方はありましたし、その中で、例えば新座はどうなのかと言ひくと、排除するということはないだろうなと思ひます。

教育相談についてのご質問ですが、もう一度おっしゃっていただけますか？

○質問者4 私は社会教育主事課程を履修しておりまして、役所へ実習に行く機会がありました。その際、生涯学習の部署でお世話になりましたが、フロアを間違えてしまいまして、1つ上に教育相談の部屋があつて、お子さんと支援員の方が出ていくところだけ見て、実際に中に入ったわけではないのですが、教育相談の部屋というのは、扉が閉まつていて、プライバシーの保護だと思ひますが、どちらかというところあまり外部の人からはどういことをしているかがわからないと思ひます。そこで教育相談はどういことをしているのかをお聞きしたいと思ひました。

○高木 ありがとうございます。教育相談の場にはいろいろあると思ひます。学校の中で困つたことがあつて、例えば、学校が嫌になつて行きづらくなつてしまつた、学校よりも教育相談のほうが親が連絡しやすくて、そこで面談をしたということが実際にあります。それ以外にも、新座市の例で考えますと、カウンセラーの先生もいらっしゃいますので、カウンセラーの先生と心理相談をするときの場所としても使われています。その例からも幅広いものですね。教育に関する相談では、例えば、友達と仲が悪くなつてしまつた、どうしよう。あるいは学校に行きづらくて不登校になり、学校に行き渋るようになってしまつたという相談など、相談があれば受けると思ひ



ております。

ご質問の中で、特別支援教育に関する情報提供について、「あっせん」という言葉がありました。情報提供ですね。「こういう教育の機会があります」というような、その中で本人が考えていかなければいけないところがありますので、そういう意味での情報提供をさせていただいております。

○質問者5 私は教育学科の卒業生です。私はこの映画を観るのは1回目ですが、大空小の教育は、みんなで一緒に学ぶ環境が非常に整っていることと、しょうがいを持っている子を普通の子の中に入れるようにするのではなく、しょうがいを持っている子が学びやすい環境を整えてあげようという教育が本当にすばらしいと思いましたし、理想の教育だなと思いました。ただ、去年、東京の公立小学校で教育実習をしたり、現在、東京の公立小学校で補助員をしていますと、実際にクラスに何人か、しょうがいを持っているのではないかという子どもがいて、その子ばかり構ってしまうと授業が進まないという現実があると私は感じています。子どもが少なくなるから、先生を減らそうという動きがあると聞きましたので、理想と現実の溝があるのかなと感じています。

お聞きしたいのは、今後、学校現場は、この大空小のようにみんなで一緒に学ぶ学校になるのか、それとも今のようにしょうがいのある子は特別支援学級で学ぶことになるのか、それともまた別の方法で教育が進んでいくのかということをお聞きしたいと思います。

○高木 遠大な、大きい話ですね。先ほど先生方の数が減るという話は、財務省案ですね。子どもの数が減るから、3万何千人減らしても大丈夫だという試算です。それに対して文部科学省は、いや、そうはいかないというので数の維持を求めて折衝している状況だったと私は認識しています。一概にどちらがいいのかは、私はわかりません。

ある意味、インクルーシブ教育の非常に進んでい

る部分がありますが、私はこういう見方をしています。大空小に来ている特別支援対象のお子さんがいらっしゃいますが、保護者の方は、恐らくそのしょうがいを受容されていると思います。セイシロウ君やそのほかの転入生のご家族でも受容されている。だからこそ、そこで何ができるかということをあかさまに話せるのだと思います。

その中で、本当に大空小のようになるのかどうかと言われたときに、現行の法律から考えますと、特別支援学校への就学については、1つの判断がなされていて、保護者と本人の合意形成がなされた場合においてという、平成25年の学校教育法施行令の一部改正がありまして、今まで支援学校に入学していたお子さんたちの状況が変わったというのがあります。そこは法律的な話です。その中で、支援学校や支援学級と通常学級というのはどうなっていくかということ、恐らく支援学校はなくなってしまうと思います。映画の中でも、非常に重篤なお子さん、自閉症のきついお子さんがいらっしゃったと思いますが、現実的に考えていったときに、多種のしょうがいがあります。病弱だったり、肢体不自由だったりしたときに、本当に全て通常の学級に入ってこられるのか。通常学級で全てを整えられるかということについては、現状としてはまだわからない。そして、将来的にどうなるかもわかりません。

ただ、その中で大空小がすごいなと思うのは、全部ひっくるめて、まわりの子どもたちを変えていくことによって成長させていく取り組みです。地域の学校で、そして支援学級で、課題のある、しょうがいのあるお子さんたちも入っていくという流れはあると思います。最初に熊上先生からお話のあったとおり、普通学級で発達障害のある児童が6%くらいという状況では、30人いれば2人くらいしょうがいのあるお子さんがいると考えていくと、非常に難しいところも今後出てくると思います。それ以外のお子さんたちの中にもいろいろな課題のあるお子さんは実際にいるので、そこにどう対応していくのかということについては、今のところ解答はありま

せん。ただ、教員の数が減ることに関しては、おそらく文科省がどうにか抑えてくると思いますので、推移を見守っていただければいいのかなと思います。

○熊上 ありがとうございます。私から一言、先ほどマーちゃんという子どもがいたから学ぶことができたとおっしゃっていただきましたが、僕も本当にそのとおりだなと思います。Challenging behaviorの話が出ましたが、いろいろな問題を起こすというのは、その子からしてみれば、この環境ではよくないんだよと言っているわけですね。だから、Challenging behaviorをする子どもは、環境を変えるとか、その子に配慮したことをしてあげれば落ち着くことができるということを学ばせてくれる存在かなと思います。だから、定型発達の子だけではなくて、しょうがいのある子、外国にルーツのある子、衝動的な子など、いろいろな子どもがいますけれども、そういう子たちが心地よく暮らせることで、その子たちが住みやすい社会、住みやすい教室のあり方ができると思います。マーちゃんがいてくれたからすごく学ぶことができたという大空小の先生のお話は、それが人権という、きょうのテーマで言えば、全ての人が生きやすくするために環境を整えていくことであり、教育の場面でも、社会でも求められるのかなと思いました。

あと、先ほどの全てが大空小学校になれば良いのに、というお話ですが、大きなことも大事ですけども、目の前のことをやっていくしかないと思います。大きなことと言えば、例えばこういう映画を観て学校や地域の研修会に使うというのも良いですね。すなわちマクロレベルです。あとはミクロレベル。目の前の子どもたちの環境を調整するといったことですね。そのミクロレベルとマクロレベルの両方で行動していくことが、やはりこれからのたくさんの大空小学校をつくっていく上で大事かなと思います。

ます。

○高木 この学校は、子ども自身に対して厳しいと私は思いました。しょうがいを持っているお子さんに対してもそうだし、その周囲にいらっしゃるお子さんに対しても厳しさというのはすごくあると思います。運動会のリレーの場面で、校長先生の言葉をどう思われましたか。今までやってきているんじゃないか。みんな6年間一緒にやってきている。でも、それがその場でできないということに対して、きっと校長先生は憤りを感じたのです。だから、ああいふふうにおっしゃったんですね。では、全員が走るリレーを本当の勝負としてどのようにやらせられるのかということ、本当に考えさせている。そのための支援の仕方を子どもに考えさせるけれども、教員全員で走らせようとする。周囲の子どもたちに対しては、生きる力みたいなものを身につけさせているのかなと思ったところがありました。特に校長先生はこのようなやり取りをお子さんたちとやっていくことについて、セイシロウ君、カズキ君などいろいろな課題のあるお子さんに対しても、同じように厳しい姿勢をとっているのが、自分の中ではすごく印象的でした。それが結局、お互いにとっていい。220人全員にとって一番いいスタイルとして、校長先生は築き上げてきた。だからこそ、先生方に求めるのかなと。特に男性の座親先生でしたか、ああいふふうな対応をする。撮影があっても関係なくはつきりとする。相当意見を言いますよ。学校の学校力のすごさというのを見たような気がします。

○熊上 ありがとうございます。この映画を観て、教育問題、しょうがい問題ということと同時に、人権問題といえますか、あらゆる人を包摂していく社会というものを皆さんで一つ一つつくりあげられるようになっていければいいなと思います。

以上